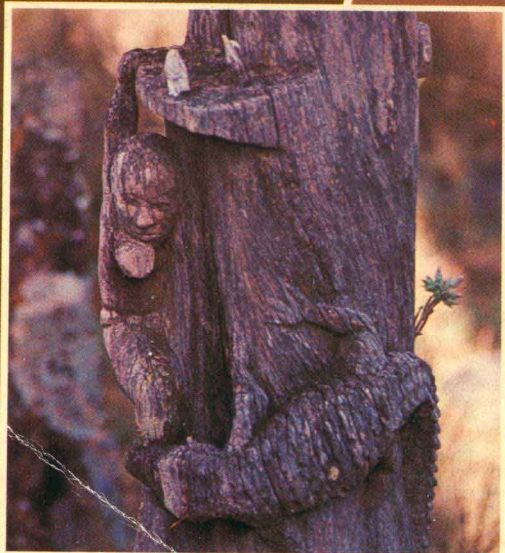


硬派と宿命

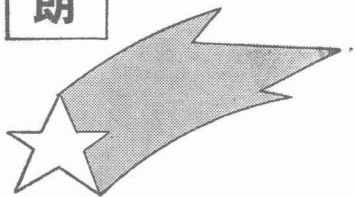
はぐれ狼たちの伝説

豊浦志朗



硬派と宿命はぐれ狼たちの伝説

豊浦志朗



豊浦志朗（とよら・しろう）

1944年生

早稲田大学法学部卒業

著書「アラスカエスキモー」（共著）朝日新聞社

現住所 東京都杉並区上荻1-22-13・408

硬派と宿命 一九七五年四月一〇日発行

著者 豊浦志朗

発行者 吉江和正

印刷所 日本美術印刷(株)

発行所 (株) 世代群評社

東京都港区芝大門一丁目八

振替 東京 一四四一四三

電話 (四三二) 五八六六

目次

序章 ● 硬派とは何か 1

——はぐれ狼もしくはは行動の文学論——

第一章 ● 刺青の方舟カヌーが曳航される日 9

——ミクロネシア独立へむけての前史——

第二章 ● 匿名の硬派たちの白昼の夢 85

——マダガスカルの消された記録——

第三章 ● ひからびた無頼の伝説 165

——テキサスのジジヨの肖像——

第四章 ● 人種主義の外道筋 213

——南ア共和国の強姦形而上学——

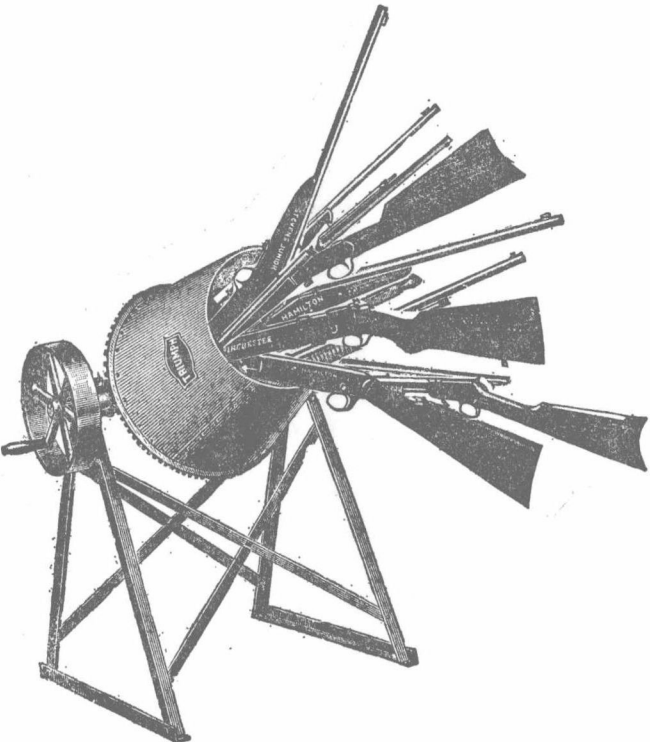
第五章 ● かぐや姫の逃亡地帯 275

——月を射るマグダラのマリア——

序章

硬派とは何か

はぐれ狼もしくは行動の文学論



硬派とは何か。左右激突の現場に突如として登場してくるこちこちの行動至上主義者である。体制の牙城めがけて不意に直撃弾をしかける攻撃者である。行動こそが万能だという神話の守護者である。したがって、硬派の分布は多岐にわたる。革命の側にもあれば反革命のサイドにもいる。民族解放戦線の中にもいれば、弾圧者の傭兵の中にもいる。無頼の一味の中にもいれば、警察官の中にもいる。共通していえることは、硬派はつねに状況の最前線で行動するということだ。

硬派は状況の最前線にいるが、実のところ、政治的なことについてはよく理解していない。政治的な発言はするが、それは状況を分析した結果というよりも、みずからの行動に光を与えるためである。硬派は目的を選ぶ。しかし、目的のために行動するのではない。行動するために目的を選ぶのだ。なぜなら硬派は行動していなければ窒息死してしまうからだ。行動こそが何にもまして重要なのである。かくして、通常、手段とされているものが目的化する。目的とされているものが手段化する。この逆転こそ硬派の最大の特徴である。

硬派は非政治的発想の持主であるにもかかわらず、なぜ左右激突の現場に登場することができるのか。状況が硬派の跳梁なしでは打開できないからである。したがって、硬派の動きはまさに状況そのものといっている。その結果、硬派は意識しようとするまいときわめてラディカルな政治的行動をしようのだ。

硬派の出現は時代の要請であるが、誰でも硬派になれるというわけではない。硬派にはある魂が必要である。その魂は幼児期に古い英雄譚や伝説、お伽噺によって形成される。それがさしたる紆余曲折を経ずに直截に行動の動機に結びつく信念に変わる。したがって、硬派がその信念を口にするとき、それはきわめて他愛なく聴こえる。しかし強固だ。大杉栄は書いている。

「ぼくは精神が好きだ。しかし、その精神が理論化されると大がいはいやになる。理論化の行程の間に、多くは社会的現実との調和、事大的妥協があるからだ。まやかしがあるからだ。精神そのままの思想は稀だ。精神そのままの行為はなおさら稀だ。生まれたままの精神そのものすら稀だ。……（中略）……ぼくがいちばん好きなのは人間の盲目的行為だ。精神そのままの爆発だ。思想に自由あれ、しかしまた行為にも自由あれ、そしてさらにまた動機にも自由あれ」

かくて、硬派は自由な、したがって孤独な動機にもとづいて、状況の中へと突入する。

硬派は孤独である。その行動は称賛されたり憎悪されたりするが、その動機は誰にも真の意味で理解されないからである。したがって、硬派は他者と同盟は結んでも同志として共同体を構成すること

はない。共闘はしても完全な連帯関係にはいることはないのである。その行動が先行しすぎているか、あるいは遅れすぎて猿芝居になっているからだ。硬派はその孤独をいやそうとしてますます行動に走る。かくして、硬派は表面上いかなる共闘関係を保つていようと、永遠にはぐれ狼の宿命を背負わざるをえない。うち棄てられた野獣のごとく硬派は吠えつづけ、行動は烈しさを増す。その結果、硬派は裏切られ追放される。硬派の行動至上主義はかならず共同体の邪魔になるからである。裏切りの森を抜け、淋しさの尾根を越え、空しさの谷をはいあがり、硬派が辿りつくのはどんな頂か。

硬派がその行動至上主義によって獲得しようとするものは何か。実をいうと、何も無い。硬派はその行動によって富を得たり名誉を得たりするかも知れない。しかし、硬派にとってそんなことはほとんど意味を持たない。というのも、硬派の目的は行動することそれ自体にあるからだ。硬派の狙いは、行動の中に文字を描こうとしていることにある。硬派が突撃する政治状況は原稿用紙、硬派が同盟を結ぶ党派や組織体はペン、歴史は版元である。

硬派が試みる行動の文学は、硬派が行動の個人的な動機づけをした瞬間にはじまる。文学は唯心論的であり理想的であり固定的であり反日常的である。すなわち絶対主義の領域だ。これにたいし、状況は唯物論的であり現実的であり流動的であり日常的だ。すなわち相対主義の世界である。英雄譚や伝説、お伽噺の中で形成された魂が自由な動機にもとづいて行動を選ぶとは、この絶対主義の領域を相対主義の世界へ架橋するということだ。文学の世界を現実の状況の中に持ちこむことである。硬派

が行動の中で描こうとした文学は、みずからの死によってしか大団円を迎えることができない。物語の結末には、悲劇的な死こそふさわしい。死が悲壯であればあるほど文学の価値は高められていく。死こそ硬派の戴冠式である。

硬派は死によってみずからの魂の発祥地たる古い英雄譚の世界へ回帰し、そのまたはるか彼方の伝説やお伽噺のさざ波の中へみずからを浮遊させることができる。岡本公三はイスラエルの法廷でこう陳述した。

「……われわれ三人は、死んだあとオリオンの三つの星になろうと考えていた。それは子供のころ、死んだらお星さまになるという話を聞いたからである。信じられないまでも納得する気はあった……」

硬派とは誰か。久坂玄瑞や雲井竜雄、古田大次郎や西田悦、あるいは江連力一郎や小日向白朗を想いだす人もいるだろう。ジェシー・ジェームスやパンチョ・ヴィルラ、アゼーフやナット・ターナー、あるいはアラビアのロレンスやフランシスコ・サバテを考えるかも知れない。その際、彼らの政治的役割云々よりも、彼らが残したロマンチックな芳香のみが私たちの頭の中に漂ってくる。これこそがまさに彼ら硬派の唯一の遺産であるかのごとく――。

あの子死んだよ

あの子小さなカンオケに入ったよ

あの子馬鹿だよ

馬鹿だけど

なかなかおつな別れの言葉言って行ったよ

あの子馬車にゆられて

墓場のとびら開けたよ

あの子の体

飲んだゲキヤクで真青だよ

あの子銀色の折紙を頭にのっけて

寒そうに肩すくめていたよ

あの子そして

どこへ行くんだろう

あの子黙って

メラメラと燃えて行ったよ

メラメラと

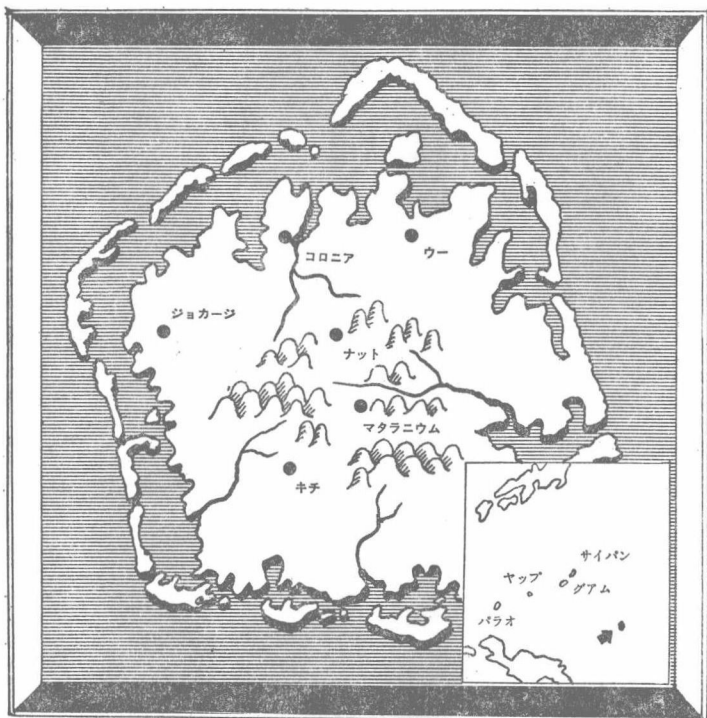
坊主のケサを撫ぜたよ

硬派は夭折した女流詩人・長沢延子の奏でるメルヒエンに似て、ロマンチックでしかも不気味な問いかけを一方的に残したまま、私たちの世界から消えていく。本書は、私の旅のさなかで収録した硬派に関する五つのルポルタージュである。残念ながら、典型的な硬派は登場してこない。前段階硬派、匿名の硬派、不完全燃焼の硬派、暗闇の中の硬派、そして硬派の延長線上にあるもの。いわば硬派の番外編である。しかし、番外編だからこそ、より鮮明に状況を照らしだす役割をこの硬派たちは負うているのだともいえよう。

第一章

刺青の方舟カヌーが曳航される日

ミクロネシア独立へむけての前史



ホナペ島

1 登場

ときとして歴史は、その激動期に、本来もつとも後衛に属すると思われる人物をいきなり状況の最前線へ追いやる。ダニエル・ロペスもそういうタイプだといってよからう。一九七二年秋、羽田空港でグアム島からのパン・アメリカン機のタラップを降りるひとりのミクロネシア人があった。小柄である。どうみても肉体労働には耐えられそうにもない身体をしている。しかし、その立ち振舞は、いかにも健康的な明るさが滲みでていた。浅黒い肌。顔だちはわりと整っていたが、歯が一本抜けており、笑うと何ともいえない剽軽さが散らつく。ダニエル・ロペスは足どりも軽く税関を通りぬけた。彼が持参したものといえは、黒いアタッシュ・ケースただひとつ。しかし、この中には、日本政府にとっては日の目をみてはならぬおぞましき歴史の残滓がぎっしりと詰まっていた。とうの昔に腐蝕したはずの記録がファイルされていたのである――。

第二次大戦で日本が降服するまで、ミクロネシアは南洋群島と称され日本の統治下にあった。南洋群島の統治は国際連盟の委任により、すなわち、国際連盟規約第二十二条の規定によって、日本が委任統治の形態をとったのだが、一九三三年、日本が国際連盟を脱退するにおよんで、単なる占領のかわりかたちをとる。ダニエル・ロペスは日本が南洋群島を占領中に彼の出身地ポナペ島で起きたある事件の決着を求めて、単身、東京へ出むいてきたのであった。彼の要求は単にその事件の解決だったが、それはミクロネシア全体、いや、中国や朝鮮、それに東南アジアを含む環太平洋地域全体にまたがる問題の解決を心ならずも日本政府につきつけることになる。ダニエル・ロペスは三十年前、日本政府がポナペ島に残したつけをとりにきただけなのだが、彼が持ちこんだ勘定書には、もし日本政府がこのつけを払うと、環太平洋地域全体の莫大なつけを支払わねばならなくなるといふ暗黙の伏字が含まれていたのである。この暗黙の伏字こそ、日本政府が瞞着と詐術によってほおかぶりしてきた過去の植民地政策および戦後の高度成長の代価だった。かくて、南太平洋の彼方から突如として出現した四十二歳の男が、日本政府の欺瞞そのものをゆさぶるといふバンドラの箱のバラードが奏ではじめられるが、その前にミクロネシア全体の簡単な俯瞰説明を蛇足ながら試みよう。

世界地図を広げて欲しい。赤道を中心として無数の点が銀河のごとく散らばっている。称してミクロネシアという。ミクロネシアも南洋群島も、その名称は植民者が地図のうえでかってに線を引きつけて名づけたものであり、そう呼ばれるための妥当な根拠は何もない。この地域は現在、マリアナ群島(サイパンなど……)、パラオ諸島、ヤップ島、トラック諸島、ポナペ島、マーシャル群島(ビキニ

環礁など……)にわけられてはいるが、言語などが共通しているわけではない。また、ポリネシアとミクロネシアとの間も、はっきりわけねばならぬほどの理由はない。いままでの歴史のなかで、政治的に分けてに区分けされてきたのであり、一方的に名づけられてきたのだ。

ミクロネシアへの最初の侵入者はスペインである。一五二一年にまず大航海家マジェランがグアム島に上陸する。それからは、冒険商人やカソリックの宣教師、軍人などが次から次へとこの銀河のような島々に押し寄せてくる。スペイン政府は一八八六年ヤップ島に翌年ポナベ島に政府官吏や駐屯守備隊をおいた。

一八九九年、米西戦争に破れたスペインはグアム島とフィリピンをアメリカに盗られ、ポナベ、ヤップ両島をドイツに売却して太平洋から姿を消した。ドイツ時代の始まりである。

しかし、ドイツは長くは持たなかった。第一次大戦に参加した日本は、これらの群島をあつという間に占領し、戦争終結と同時にベルサイユ条約によって国際連盟の委任により統治することになる。一九一九年のことだ。

日本は、国際連盟にたいして連盟規約および委任統治条項の規定と精神を遵守するとうかたちでこのミクロネシアを占領した。これにもとづく統治の制約は、国際平和の維持に関する条項、植民地住人にたいする福祉に関する条項、国際連盟理事会にたいする手続き上の条項の三類にわかれるが具体的に次のごとくである。

(一)警察および地方的防衛のためにする場合のほか、土着民の軍事教育を禁止する。(委任統治条項 第四条)